

# 言語感覚を生かした豊かな読み取り

——芭蕉「鷹一つ……」の句をめぐる——

石 井 茂

まえがき

愛知県渥美半島の先端伊良湖崎には、次の三つの著名な文学碑がある。一つは万葉集巻一ノ二四麻績王の歌

うつせみの命を惜しみ浪にぬれ伊良嶺の島の玉藻刈り食す

もう一つは、島崎藤村作「椰子の実」の詩碑。第三は松尾芭蕉の次の句碑である。

鷹一つ見つけてうれしいらこ崎

この岬は鷹(主)にさしば鷹(の)の渡り道に位置し、古来詩歌俳諧では著名な所であるが、私は、この句について、どうして鳥をかぞえるのに「一羽」と言わず、「一つ」と言ったのだろうか、また、上空を飛翔する一羽の鷹を見ての直観は、「うれし」ではなくて「さびし」ではないのだろうか、などという、言語感覚上、きわめて素朴な疑問を抱いていた。その解決を求めて芭蕉関係の諸文献や諸研究、渡り鳥としての鷹の生態などを調べたり、二回ほど現地調査も試みた。以下にその結果をまとめ紹介しよう。

芭蕉の伊良湖行き

佐藤春夫に「伊良古鷹」という題で次の詩がある。

伊良古浜荒き島わに

世をわびてあるらん友を

つれなくもわれわすれめや

塵の世に罪得たりとて

など棄てむ風雅の友ぞ

ありし日の杜国やいかに

けふの日の野仁やいかに

忘れめや

汝が額広く眉秀つ

星月夜潮騒とぎす

保美村に埋木としてあらしめじ

いま天籠のなかなかに

あはれ知らせむよすがにと

世にうとまれし汝を見では  
 行き過ぎがたき旅人の  
 人知らぬ珠をしぞ惜しむ  
(注3)  
 伊良古白拾ふとならず  
 その浜べ勦き荒磯に  
 まごころの玉藻刈り  
 人の世の荒ぶ浪風  
 いかにしてししける友か  
 その命見まくほしさよ  
 いざ行かな畑村  
(注4)  
 わくらばに訪ふにあらねば  
(注5)  
 あとざまにくりたたむ  
 道二十五里ひたすらに  
 馬駆りぬおもかげを追ひ  
(注6)  
 東道の越人と  
 寒き旅寝の噂にも  
 夢にも汝をしのびつつ  
(注7)  
 向ひ風あまつ繩手の  
 影法師馬上に凍る霜ぐもり  
 目を上げて見よ骨山の  
(注8)  
 重たき雲のただなかゆ  
 枯木が梢をすさまじく  
(注9)  
 海越えて来し影一つ

天つ羽音のけはひして  
 音にさへ聞くや  
 夢よりもうつは更に  
 たのしく海原  
 海松に宿かるものとしも  
 波の穂を啄むとしても見えなくに  
 八重の潮々わたり来て  
 おとろへもなきぞ雄々しき  
 さればこそ荒れたきままの霜の宿  
 麦生ひてよきかくれ家やはたけむら  
 主が布子 糺ひたれども  
 鷹一つ見つけてうれし伊良古崎

(佐藤春夫全集第一巻所収)

(注) 1 杜国の流謫後の号。2 今の渥美町保美。3 伊良湖浜産の白碇石。4 保美に隣する村。5 鳴海からあと戻りしての意。6 芭蕉の門人。北越の出身で名古屋に居住。7 今の天津の辺。「繩手」は繩のように細く長く道。8 伊良湖崎尖端の山。渡る處と縁が深い。

右の詩は、貞享四年(一六八七)十一月、芭蕉が門人の越人を伴って、渥美半島の先端保美の里に流謫隠棲の身の門人杜国を訪れ、共に伊良湖崎に遊び、「鷹一つ」の句詠をする経緯を踏まえての春夫の詩で、かの芭蕉の俳文紀行「笈の小文」(宝永六年刊、別名卯辰紀行・吉野吟行)の次の文章に依つたものであろう。

「三川の国保美といふ処に、杜国がしのびて有けるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より跡さまに二十五里尋かへりて、

其夜吉田に泊る。

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

あま津繩手、田の中に細道ありて海より吹上る風いと寒き所也。

冬の日や馬上に氷る影法師

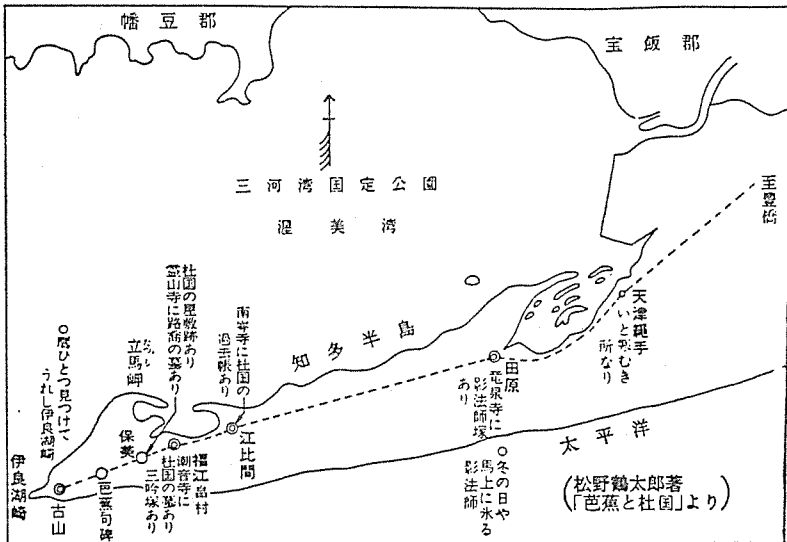
保美村より伊良古崎へ吉里斗も有べし。三河の国に地つづきにて、伊勢とは海へだてたる所なれども、いかなる故にか万葉集には伊勢の名所の内に撰入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや。骨山と云ふは鷹を打処なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらご鷹など歌にもよめりけりとおもへば猶あはれなる折ふし、

鷹一つ見付けてうれしいらご崎」

(校本芭蕉全集第六卷)

句碑は渥美町福江(近くに字名の保美がある)から国道二五九号を四キロほど南下すると、伊良湖港に近く宮山原生林を背景とした「千枚岩」の岩上に、「芭蕉翁之碑」という苔むした石碑が見えてくる。そしてその下の小公園風な所に、近ごろの建立と思われる「鷹一つ」の句碑がある。岩上の碑は寛政元年(一七八九)地元俳人路喬(後述)らの遺志をついで、この地の人々が建てたという。

芭蕉のこの時の旅は、貞享四年神無月二五日頃、京を目ざして江戸を立ち、同一一月四日鳴海の下里知足の家に草鞋を脱ぎ、そして親愛する門人杜国が、空米取引きの科で尾張藩より領地追放となり、渥美半島伊良湖崎に近い保美村に隠棲していると聞き、驚き悲しんで早速に見舞い訪問を思い立ち、名古屋居住の越人に同行させて、



二五里(約百キロ、吉田つまり今の豊橋までが約六〇キロ、豊橋保美間が約四〇キロ)の道程を戻り旅したのである。十一月一日豊橋に泊まり、折からの寒さをこらえて、「寒けれど…」の句を越人ねぎらいの気持ちをかめて詠む。そこから大体今の二五九号国道に当たる旧道を、三河湾上を渡って来る寒風にさらされながら、馬を駆って天津繩手へとかかる。その辺は一面の田圃(現在も)で、その中を縄のように続く細道を歩む。寒々とした自分の姿を客体視して、「冬の日や…」と詠む。そこから先を他の俳書(校本芭蕉全集第一巻所収)によって補うと、「合歡(あはれ)のいびき」(千代倉蝶羅編、明和六年刊)には「伊羅古に行道、越人酔て馬に乗る」と記して、

ゆきや砂むまより落ちて酒の酔

とあり、酒好きな越人が、江比間(同所南岑寺に杜国の過去帳あり、後述)にほど近い宇津江の坂で、酔って雪や砂の上に落馬したのを、土地の名にあやかっ(江比間と酔ひ馬)即興的に詠むという一齣もあつたらしい。そして保美の杜国の住居(路傍に石柱標識あり、近くの湖音寺にはその墓あり)に到着しての芭蕉の詠には、「曠野(あらく)」(芭蕉七部集の一、元禄二年刊)に「人のいほりをたづねて」と記し、

さればこそあれたきまゝの霜の宿

とあり、予想どおり荒れ放題で、霜が寒々と置いてあつて痛ましいことよと、名古屋時代の米穀富商の住居と対比して、深い同情を漏らしているが、一方では「笈日記」(支考編、元禄八年刊)にあるように、

妻はえてよき隠家や畠村

と、冬でも妻が青く温暖な所で、隠れ家としては恰好な所だと慰めいたわり、また同書で、

先祝へ梅を心の冬籠り

と、これも南国的で、梅の花見もほど近いのを祝って、冬籠りとはいいものだねと、前句同様な心情を詠む。また「真蹟詠草」(編者不詳、天保ごろの刊か)では「此里をほびといふ事云々」と、由緒ある土地がらをはめ、

梅つばき早咲ほめむ保美の里

と、これも南国的で花咲く春も近いことであろうと、ところほめの気持ち詠む。これらには、落魄の境にある杜国への深い思いやりがありありと感じられ、情愛に結ばれた師弟関係のほどが偲ばれる。

さて、「笈の小文」の本文に戻ろう。芭蕉は杜国宅から一里ほどの伊良湖崎へ連れ立って散策に出かける。そこは三河の国とは地続きであるのに、どうして万葉集では、「麻績王の伊勢国の伊良虞の島に流さるる…」のように、伊勢の名所の部(芭蕉のこの言は万治二年(一六五九)刊「歌枕名寄」によるかと尾形竹氏指摘)に入れているのだろうか、旅をすみかとする地理的感覚から疑問視している。またこの埼玉のあたりでは、いらご、白という碁石用の美しい小石を拾ったようである。それは「毛吹草」(俳諧書、松江重頼編、正保二年刊)にも「伊良湖の碁石貝」とあり、著名であつたらしい。「骨山」は岬先端の小丘陵をさし、小松ながら老松古木に覆われ、渡り鳥の鷹を捕獲するに恰好な所であつたようだ。それ

はさしば鷹という種類で、南方から飛来し、秋十月頃にまた飛び去る通路に当たっていて、和歌にも、次に見られるように「いらご鷹」として有名である。特に芭蕉の敬慕して止まぬ西行（一一一八〜九〇）の「山家集・下雑七」には、

二つありける鷹の、伊良胡渡りをするを申けるが、一つの鷹は留りて木の末に掛りて侍と申けるをきゝて、

1389 巢鷹わたる伊良胡が崎を疑ひてなほ木に帰る山婦りかな

1390 はし鷹のすゞろがさでも古るさせて据ゑたる人の有難の世やとあり、大体の歌意は、二羽の鷹がいて、間もなく伊良湖崎から南の方へ渡って行くと聞いていたら、うち一羽は確かに渡って行ったが、まだ一羽は居残って梢に留まっていると、ある人が言うのを聞いて、△第一首め▽これは巢鷹（雛の時に捕えて飼ひ馴らした鷹）ではなくて疑深く渡ろうとしない山婦り、（山で毛変わりしてのち捕えた鷹）というべきであろう。山に帰ると山婦り鷹とを掛詞的にしやれ、「なほ木」に素直のなほきを掛け「疑ひ」と縁づけた詠。△第二首め▽はし鷹（鷹の一種、小型で鷹狩りに適す）をしつかり据えさせて思いのままに扱う人（鷹匠）は少なくなつたものよほどの意か。「すゞろがさでも古るさせ」とは、そわそわさせず長く使い馴らすの意か。すず（鈴）古る（振る）は鷹と一連の縁語。なお藤原家隆（一一五八〜一二三七）の「壬二集」にも、「ひき据ゑよいらごの鷹の山がへりまだ日は高しころそらなり」という歌があり、芭蕉の脳裏にはこんな古歌が浮かんでいたことであろう。わけても西行は芭蕉の無上の崇敬を専らにし、六三歳から七八歳頃にかけて

伊勢に庵住し、神官らに作歌指導することもあつたようで、右の歌の外にも附近の島々を詠んだ次のような歌などもあり、「猶あはれなる」とは、こうした西行の歌への追慕の情などが主となつていう。

伊勢の答志と申す島には、小石の白のかぎり侍浜にて、黒は一つもまじらず。対ひて菅島と申すは黒のかぎり侍也。

1382 菅島や答志の小石分け替へて黒白まぜよ浦の浜風

1385 合せばや鷺と鳥と碁を打たば答志菅島黒白の浜

鳥羽―伊良湖間往復のフェリーから見ると、答志島は白い岩壁や浜辺が顕著であり、菅島の方は心なしか黒ずんで見える。

さて、かかるいきさつで詠まれた句「鷹一つ」の一つとは、西行の一つ二つというかぞえ方に関連していると解してよからう。

ついでながらこの件について若干付言しておきたいことがある。

二、三年ほど前、恩師石井庄司先生東大分院ご入院と聞き病室に見舞い、たまたまこの件を漏らしたところ、数日後に次のようなお手紙をいただいた。「…鷹一つの一つはたいへん面白いお考えで、病院へも岩波文庫本の芭蕉俳句集を持ち込み、いろいろあたってみましたが、とくに貞享五年ニハ一つという用例がいくつもあり、貞享四年の鷹一つはその前例でもあり、ちよつと考えさせられています。貴案は支持いたしますが、芭蕉にはこうした例もあるというところを書き添られてはいかがか」とご懇切なご指導をいただいで、今さらながら先生の旺盛な研究心と、師恩の情の深さに感服した次第である。次にそのご指摘の用例を列記させていただきます。

「芭蕉「一つ」の例 岩波文庫「芭蕉俳句集」

一つぬいで後に負ひぬ衣がへ 貞享五年「笈の小文」

杜若語るも旅のひとつ哉

ほととぎす消行方や鳥一つ

なつ来てもただ一つ葉の一つ哉

月影や四門四宗も只一つ

夜着一つ折出して旅寝かな 元禄四年「真蹟」

偽書というのですが「翁反故」に、

朝風や只しる雲に鷹ひとつ

嵯峨日記に左の例あり

机一、名酒一壺盃一、

右の用例は先生ご指摘のように、ほんどが貞享五年以降であるところから、「鷹一つ」はその先蹤ということになるかと思う。そうだとすれば、「うれし」とは、西行の古歌などに見られるあの鷹と出会えてうれしいの意味合いも含まれることになろう。芭蕉の旅は歌枕を求め、旅に古歌や古人の面影を偲ぶところに大きな意味があったのである。これを「うれし」の第一の理由と考えたい。

また、越人編の「鶴尾冠」(享保二年刊)には、

「杜国が不幸を伊良古崎にたづねて、鷹の声を折ふし聞いて、

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき」

とありその句意は杜国の不幸に胸をいたため、夢にその不遇不運なきまを描いてきたが、現実にあつてみると、案に相違して元気で明るく、かつ鷹のように大空を自在に駆けて、悠々自適を楽しみ、何と

頼もしいことよほどの意で、この句に関連づけると、「うれし」の意は、鷹を杜国にたとえ、その悠々自適ぶりをうれしく満足に思うというニュアンスも籠められていると解されよう。これを「うれし」の第二の理由と考えたい。流論といつても翌貞享五年三月には、吉野の花見同行を約束し実行するのである。大方の様子が察せられよう。

さらに私は渡り鳥としての鷹の生態から、この「うれし」に別の理由をも考えたい。この空をさしは鷹が大群をなして南海に渡るのは秋十月ごろである。先年の新聞(昭和六一・一〇・一一朝日新聞)「お天気衛星」欄に、倉島厚氏が「タカ渡し」と題し次のように書いている。十月五日には午前中だけで伊良湖崎上空を「約千五百羽のサシバ」が飛んで行った、そして鹿児島県大隅半島佐多岬に集結し、「二十四節気の寒露」八月八日Vごろから、数百羽が一群となって次々に南西諸島沿いに南下し、途中宮古島で降りてひと休みした後、再びグループを作って東南アジアの空に飛び立って行く、屋久島ではこれを「鷹渡し」という、大体以上である。昨年一月私は宮古島に渡り、土地の古老からその鷹の渡る様子を聞いたが、昔は何万という大群(今でも数千を下らない)が空を覆って渡来し、竿で叩き落として食べた。それが島民の栄養を保つ重要な蛋白源であった。これは伊良湖居住の人々の証言も大体一致している。さて、芭蕉がここに到来したのは、旧暦の十一月十日過ぎの頃である。今の十二月の真冬で明らかに渡る時季からは全くはずれている。もう一羽も残ってはいないだろうとあきらめの気持ちで来たところ、

たまたま大空に一羽の飛影を見出したので、やれうれしやと直感するのも当然であろう。以上からこの句の「うれし」とは、季節はずれの鷹、西行などの古歌の鷹、鷹のように悠然たる杜国の姿、の三つを見てのよろこびと解されよう。

以上でことばを見つめ、そこに秘められているものもろの意味をさぐり、より深く豊かな味わいを見いだし、国語の授業、わけても文学のそれを、たのしく興行きのあるものとしたための教材研究は終わりとする。念のため、教材研究はそのまま指導内容とはならない。相手の発達段階により扱う度合いに軽重深淺のちがいのあることは言うまでもない。場合によってはその片鱗をおわすという程度で終わらなければならないこともある。しかし、多くの学習者の中には、格別な意欲や関心を持つ人もあろう。そうした者にはより深い示唆を与えることも必要である。そんな意味で、深く広い教材研究は指導の多様化、個別化をも可能とする点で意義がある。

特に、指導のためという方便的な研究でなく、教師自身の教材研究を深めるといふ主体的で意欲的な研究態度は、必ずや学習者側にも研究心を喚起するという点での、何らかの暗示や示唆を与えずにはいないであろう。教えることは即まなぶことである。絶えざる研究によつて、枯渇することのない指導内容を蓄積する、そこに指導のゆとり、教師のゆとりが生じる。そんな教師即研究者、研究者即教師が、私の現在までの夢であり、稚拙ながらの歩みである。これからも微力非才ながらその歩みを続けていきたい。

さて、前記の「うれし」の一つとして、伊良湖流瀆の枯国の鷹然

とした元氣な姿に接したことをあげたが、その点についてついでながら補説し次に補強しておくこととしたい。

#### 杜国と伊良湖

杜国（?）一六九〇の姓は坪井、通称庄兵衛、名古屋御園町に住み藩の御用をも賄う富裕な米穀商で、町代をも兼ねていたが、禁制の空米取引を犯し、貞享二年八月一日、「御領分御追放」となることは、次の尾州家古記録「事跡録」に明記されている。

名古屋御園町之町代庄兵衛ト申者無之米ヲ噂ニ而致売買町代ヲモ年仕先年ヨリノ御法度ヲ相背キ候段不届ニ付御領分御追放并右商ニ付指取之者十八人之内納屋町善六手代佐七海老屋市郎左衛門手代清九郎此兩人別而仕方不届ニ付御城下追放残り十六人過意牽舎可申付旨被仰出留書方状留

（松野鶴太郎著「杜国と芭蕉」より）

右からこの時の処分は、商人は杜国の外十八人いて、店主級の追放は杜国一人、手代級は二人、他一人は身分不明であるが入卒という処分で、杜国の場合が最も重刑に当たる。その犯罪動機については不明。おそらくは使用人にそうした悪をおかす者がいて、主人として取締まるべき地位にありながら、風雅にふけていて怠ったためとか、御用商人や町代の地位にあったことゆえの見せしめのためとか、いろいろ考えられているが、尾形仇氏は「史家によれば、藩財政の危機打開のための尾張藩の内命を受けて行った空米取引が、幕府のきびしい取締りに触れ、藩の犠牲となって罪を蒙ったものだという」（『鎮魂の旅情』—笈の小文考）と述べるなど、諸説あるが、

いずれも杜国被害説をとっている。芭蕉との俳諧を介しての人間関係の至純さから見て、かかる弁護説も当然であろう。次に、なぜ伊良湖を領外追放地として選んだかについて考えてみよう。これについても資料不足で推論の域に留まらざるを得ない。先ずこの地が尾張藩の領分外（大垣支藩領）であることである。そして、大磯（雄氏）は「忠実な手代・家僕の類の者」で「三河の畠・保美あたりの出身者」がいて、「その者の手引きによるか」（愛知学芸大研究報告「杜国新考一」）と述べ、さらに同名紀要二に於て、地方研究家天野志郎氏の研究などをふまえて、その「手引き」は、地元の人（白梅下路喬（？）寛政元・一・二四日、六六歳没）の先祖に当たる与八なる者（一説に権八）という。路喬は杜国に対する敬慕と同情の念が深く、その没後五五年目に当たる延享元年（一七四四）には杜国の墓を同志と共に、杜国居住地（推定）に近い現渥美町福江の潮音寺に建立し（元の墓所は同寺附近の潮音原と呼ぶ無縁墓地内）、さらにその百年忌に当たる寛政元年（一七八九）三月二〇日には、前記伊良湖崎に芭蕉翁之碑を建立している。（実際はその二か月前に死去しているが、同志の人々がその遺志を体しての供養で、その供養は盛大でその様子は「十かへりの松」なる記録に詳しく）さて、その路喬の家系は今に伝わり、現当主は家田重弘氏といい、その墓所には路喬の墓もあり、その法名は「釈敬証」といい、墓石には「西方は夕日明るき浄土かな」の句も刻まれている。その墓所に近い所に杜国の元の墓があったようである。

次に杜国の墓碑と過去帳とについて、墓は前記潮音寺にあるが、

過去帳は同所から約六キロも豊橋に近い江比間の南岑寺にある。これは同寺を家田家が菩提寺としているところからうなずかれようが、両者の記述はいささか違い点がある。一昨昭和六〇年秋、渥美町教育委員会の鈴木善六氏の案内指導を受け、私はつぶさに实地調査を遂げることができた。先ず墓碑にはかなり長文にわたる杜国の紹介があり、同所に葬るべきさつについては、「…因病間遺言 築墓於潮音原…」とあり、罪人としての自覚からか、生前にその墓所をこの地の無縁墓所へと遺言していたらしい。碑の前面には、

元禄三年庚午二月廿日

法名 釈寂退三度位

南彦左衛門杜国之墓

とある。一方、南岑寺の過去帳は三種（同寺の住職の転写による）あり、うち二種には杜国（うち一種には「午國」）の記事が見え、二種に共通する点は、没年が「元禄三年三月二十日であり、法名は「寂泰」、俗名は「南喜左衛門」となっている（傍点は筆者）。墓碑と過去帳との違いは、一先ず過去帳を信頼してよからう。この地に隠棲しての俗名は南喜左衛門、俳号は野仁（野人ども）と号し、その期間は貞享四年八月から元禄三年三月までの約三年余という、短いものであった。しかし、この地に蒔いた俳諧の種は、路喬らによって大きく育てられたようである。前記「十かへりの松」にその一端をうかがってみよう。まず連句では、

十かへりの花はさびしく塚の松

今も朽せずその名甲ふ春

路喬

子蔵



やぶ入の姉も妹も来り揃ふて

免乳

よい時分なり雨の降り出し

梅居

蛆畑に葉もそよそよと月に芋

為蝶

(以下略)

などとあり、発句にも、

百経てもここ路霞まぬ後弔はん

初狂

春麦も世を隠れしも百年か(遠州白須賀) 虚白

落馬ありしむかしを語れ春の艸(田原) 麦甫

代々経ても散り失せぬ花の句かな(畠邑) 還童

(以下略)

などから見ると、杜国の悲劇と人格や俳風などが、いかに土地の人々に重く受けとめられていたかが察せられよう。前記墓碑銘の一節に「遊于遊芸 能書記典 恒産医業」などの文言があり、単に俳諧ばかりでなく、書や医の方面にも通じ、「德行」の人として尊敬され、その死に臨んでは「莫不里人拳哀傷」という状況であったらしい。現代でも、その研究熱は盛んであって、天野志郎・松野鶴太郎・斎藤専吉・粕谷魯一・鈴木正吾・上松雄司・南岑寺や栖了院の住職など(既に物故者となった人もいる)の諸氏がいる。本稿は特に天野氏・松野氏に負うところが大きく、心から感謝の意を表して止まない。

#### 杜国愛惜の声々

其角(一六六一〜一七〇七、蕉門高弟の一人)はその著「華摘」の元禄三年五月一七日(杜国死の二か月後)の条に、

「いらごの杜国例ならで失せける由を越人より申きこへける。翁にもむつまじくして、鷹一つ見つけてうれしいらご崎 とままでに逢ける昔をおもひあはれみて

羽ぬけ鳥鳴音ばかりぞいらご崎」

と記している。杜国の死後二か月ほど経ての記事で、そこに「翁にもむつまじい」間柄で、「鷹一つ」の句の出会いをあわれに偲んで、弔句として「羽ぬけ鳥云々」と吟じている。そこには羽もぬけたあわれな鷹を思つて泣くばかりという心情が描かれていて痛ましい。

また荷兮(？)一七一六、熱田の人、蕉門高弟の一人)は、

「杜国がいらごに任ゐしてほどなく身まかりけるに

蛛くものいのはかなや春の繩なはな廉」と詠む。

春の繩のれんに懸けた蜘蛛の糸のはかないさまに、無常の感懐を託した弔句であろう。

また、且粟(生没不明、名古屋の俳人)は、「杜国を夢に見て、

散梅や死んだとは見ぬ夢の内」と詠む。

この句などから察せられるところは、あまりの急死であつて、とても死んだなどとは思われないという実感の端的な表出であるようだ。

また、芭蕉の杜国訪問の伊良湖行きに同行した越人の悲嘆は痛切で、その著「鶴尾冠」に、次のように記している。

「杜国子は予が羈客たるをあはれみ、且暮懇情を尽さる。思に管飽(3)の昔に似たり。彼は富めり我は貧なり。敢て報を思はず同志断(3)

金の情浅からず、更に予が俳諧の手を引き…陸びし年月の深ければ、時として夢に入り昔を語り又夢を泣く…彼人不幸に沈み旧里を辞せしを、芭蕉老人江府に聞き甚だ憂へ、踏鞋鳴海に來り予に消息して其道路を問ふ。先登して枯藤を引き杜国が草堂に至り、三人葉を焼き夜を明かし、同じく馬を並て伊良古岬に逍遙せしも、<sup>(6)</sup>浮雲あと無く流水もとの水に非ず、<sup>(7)</sup>二人は松下の塵吾独り残れり。日々に昔を慕ふ心死して休せんのみ。」

(述) (1) 越後から名古屋に流浪の客となつた時、(2) 管絃の交わり、(3) 中国春秋時代の管絃と鮑叔との深い交方關係、(4) 同じ俳諧に志して金屬をも断ち切るような強固な友情。  
(4) 江戸。(5) 先行する道家内となつて枯れた藤製の杖を引く、(6) 雲も水も在時のままではない。(7) 芭蕉も杜国も死して松樹の下の塚に眠っているの意。「塵」はむなしくちりと化する意。

右の文章から、越人と杜国との永い厚情交友のほど、杜国の篤実温厚な人がら、芭蕉に同行した伊良湖行きの様子、そして今は師芭蕉も友杜国も既に世を去り、流涕嗚咽する越人の悲嘆のほど、などが察せられて哀切である。

次に芭蕉の愛惜ぶりを述べようと思うが、項を改めて次節でその關係の中で述べることしよう。

### 杜国と芭蕉

既述のところからも、二人の間がらは単なる師弟關係以上のものと首肯できよう。それを踏まえてさらに他の諸文献をも参考にして、その深い人間愛のほどをまとめてみよう。文献では「冬の日」「笈の小文」「嵯峨日記」などが主なもので、前記に続く「笈の小文」の文に、

「弥生半過る程、そごるにうき立心の花の、我を道引く枝折となりてよしの、花におもひ立んとするに、かのいらご崎にてちぎり置し人のい勢にて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我為に童子となりて道の便りにもならんと、自ら万菊丸と名をいふ。まことにわらべらしき名のさまいと興有。いでや門出のたはぶれ事せんと笠のうちに落書ス。

乾坤無住同行二人

よし野にて桜見せふぞ槍の木笠

よし野にて我も見せふぞ槍の木笠 万菊丸」

「かのいらご崎…」とは、前年の貞享四年一月一日から一五日にかけての伊良湖訪問をさす。そのおり翌年の弥生三月半は過ぎ(実際は三月一九日)吉野の花見に同行する約束を交わしており、杜国は伊勢に師を出迎え、その従僕役をつとめようと名を童子にふさわしい万菊丸と改め、笠の内に句を落書し合つて旅立ちしたといひきさつが述べてある。実際は旅立ちの一月ほど前に伊勢で出会い、伊賀の里に同行滞在している。それは二月中旬の杉風宛伊賀からの芭蕉の書簡に、「…尾張の杜国も吉野へ行脚せんと伊勢迄來候而、只今一所に居候」とあるによつて明白。氣の合った師弟の明るくはずんだ旅立ちの様子がうかがわれる。その行程は吉野―高野山―和歌の浦―奈良―初瀬―丹波―大阪―尼が崎―兵庫―須磨明石―京へと、四月一三日まで約一か月の長旅を共にするのである。その間随所に見られる楽しげな道中風景を一、二紹介しよう。まず同一体験を詠んだ句の感合に顯著であつて、たとえば初瀬での句に、

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

芭蕉

足駄はく僧も見えたり花の雨

万菊

両句共に王朝古典の初瀬詣での面影を志向している点で、あゝんの呼気が感じられる。「足駄はく」僧は枕草子二〇段「正月寺に籠りたるは」（初瀬参籠の精細な写真）の文章中の一文をふまえている。また高野山での作、

ちゝはゝのしきりにこひし雉の声 芭蕉

ちる花にたぶさはづかし奥の院 万菊

前者は行基（六六八〜七四九、奈良聖武の頃の高僧）の「山鳥のほろほると鳴く声きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」（玉葉集）の歌をふまえ、亡き両親への追慕のしみじみとした情を詠み、杜国は清閑の境の散る花に仏性を催し、もとどり髪 of 俗形を恥ずかしく思うと、題材は違っているも心境には共通的なものが感じられる。また長途の旅を終えて入京（四月二三日）の二日後の日付で、伊賀の窪田惣七（猿蓑）宛の芭蕉・万菊連名の長文書簡（万菊の筆は「三月十九日云々」以下の旅の概要のメモ的記述）で、道筋の箇所々々の感懐を書きつらねている中で、大和の竹の内村に伊麻という孝女を訪れ、その篤い孝心に感動し、衣替えのおりの綿入れを売った代金を献ずるといふ、感激的な場面がある。その時の杜国の感に堪えたさまを芭蕉は、「身の罪かぞへられて万菊も暫落涙おさへかねられ候」と同情的に記している。また芭蕉自身の孝女に対する感激も、「当麻に詣でて万のたつときも伊麻を見るまでの事にこそあなれ」（当麻寺の宝物への感激も孝女伊麻への感激には及ばないの意）と

いうほどであった。芭蕉・杜国は至純で感激し易い性格という点で負けず劣らずであったといえよう。「野ざらし紀行」（貞享元年八月の旅、名古屋で「冬の日」所収の五歌仙をよむ）に、「杜国における」と題して、

白げしにはねもぐ蝶の形見哉

と、杜国を夏の白芥子に擬し、自身をその花に宿る蝶にたとえ、激しく美しく離別の情を句作している。この時の出会いが初対面であるから、杜国の人からへの芭蕉の異常なほどの傾倒や耽溺ぶりが察せられよう。

次に芭蕉七部集の第一の句集「冬の日」（荷弓編、貞享元年刊）について見ると、書名の下に「尾張五歌仙全」とあるように、「野ざらし紀行」の途次、つまり貞享元年一〇月から十一月にかけて、尾張の連衆（野水・荷弓・重五・杜国・正平・羽笠）と連句興行したおりの五つの歌仙（こがらし・はつ雪・露・炭売・霜の各巻）について瞥見してみよう。

先ず杜国の発句には、「露」の巻）

つつみかねて月とり落す露かな

と、時雨の通り過ぎたあとに漏れさす月影の風情を、擬人化・擬物化の趣向立てで優雅に詠み、連句では、

7 ふうたげに物よむ娘かしづきて

重五

8 灯籠ふたつになさけくらぶる

杜国

9 つゆ萩のすまふ力を撰はれず

芭蕉

7の句に見られる、源氏や枕などの古典を読む年ごろの深窓育ちの女性像に、付け句しての杜国の句は、灯籠を贈って求婚する二人のみやびな男性像を添え、それを受けた芭蕉の句は、その男性二人を露と萩との自然物にたとえ、両者の張り合う力関係に転じ、師弟の呼吸の合ったところを見せている。なお、8の句に芭蕉はいたく感動し、典拠を尋ねたところ杜国は、「御伽婢子」の絵からの思いつきと答えたという。杜国のこうした古典趣味も芭蕉には大いに気に入るところがあったらしい。

もう一句の例を「炭壳」の巻に見よう。

2 ひとの粧まきひを鏡磨かみ寒

荷兮

3 花蕪はな馬骨ばこの霜しもに咲かへり

杜国

前句は、女性が化粧し姿を飾るため使用する姿見の鏡を、寒中のさむさに耐えて磨いている鏡職人像を詠み、それに付けた杜国の句は、野辺に放置された馬骨に霜がまっ白においてあるあたり、白いばらの花が返り咲いている、という状景描写を添える。両句のこともす世界は、寒気荒涼として鬼気迫るような緊迫感である。「ひと」は女性で「花蕪」に、「鏡磨」や男が「馬骨」に、それぞれ感合しているといえよう。尾形竹氏は杜国の句風を評して、「鬼趣ともいふべき緊張の中に悲涼感をたたえ、もしくは一瞬の機微の中に永遠を見出だし、さては風狂の境涯の中に人生のホロ苦さをとらえ」と評している。並々ならぬ鬼才である。こんな点でも芭蕉を魅了したことであろう。

次に「杜国宛」元禄三年正月一七日付芭蕉の書簡についてふれて

おこう。

「いかにしてか使も無御座ニ候。若ハ渡海の船や打われけむ、病変やふりわきけんなど方寸を碎而已候。されども名古屋の文に御無事之旨推量ニ見え申候。：中略(この間に近詠六句の紹介あり)

：急便早ニ候。正二月之間伊賀へ御越待申候。宗七も御噂申斗ニ候 正月十七日 万菊線 はせを」

これは、前年の元禄二年八月二〇日過ぎに「奥の細道」の旅を終えて大垣に入り、九月六日伊勢遷宮を見るため伊勢に出かけ、そこで杜国と会って別れて三か月余の後の書簡である。冒頭の「いかにしてか：」には杜国の訪れを切望する芭蕉のいらだちが見られ、「方寸八心Vを碎而已」がその端々な表現である。あまりの切なさから「病変やふりわきけん」と不吉な予感を漏らす、実はその頃杜国は不起の病床にあったものと予想される。三月二〇日に死んでいるところから。さて、杜国死後の芭蕉の悲嘆を描いている「蟻峨日記」芭蕉著、魚玉編、宝暦三年刊)について、これは芭蕉が門人去来(一六五一〜一七〇四)の洛西嵯峨野の落柿舎に、元禄四年四月一八日から同五月四日まで逗留していた間の日記である。

「廿八日 夢に杜国が事をいひ出して、涕泣して寤む。：(中略) 我に志深く伊陽旧里迄したひ来りて、夜ハ床を同じう起臥、行脚の労をともにたすけて、百日が程かげのごとくにともなふ。ある時へたはぶれ、ある時は悲しび、其志心裏に染て、忘るゝ事なればなるべし。覚て又袂をしぼる。」

四月二八日の夜、杜国との語らいを夢見て声をあげて泣き、その声

で目が覚めたというのである。そしてありし日の杜国を偲ぶのである。ある時は伊賀の故里に芭蕉を訪れて夜の寝床を同じうしたと、また「笈の小文」の旅には百日ほどの行程において、悲喜哀歓を共にしたことなど、忘れ得ない思い出が避つてまたまた流涕して快をしぼったというのである。まことに哀切をきわめた追懐悲情の筆致である。これほど芭蕉の深情をかきたてた弟子がほかにいたであらうか。あまりのことにやれ男色に類する関係などと、うがった見方を立てるむきもあるようだが、私は至純至誠な人間同士の水も漏さぬ感合一体の關係とみたい。尾形氏もこの日記の文言は「ただならぬ關係をさえ想像させずにはおかないひびきを帯びているが、杜国はよほど人の心に食い入るようなつかしさをそなえた人物だったのだらう」と評し、さらに『笈の小文』は杜国に対する手向ぐさ、鎮魂の書として発企された」書であると結論づけている。私もこの結論に同感で大いに啓発されているが、さらに私見を加えるならば、杜国の人生は繁栄から没落の運命をたどる無常の典型として、義経・義仲など、歴史上の無常の人物への哀慕に類似するところがあり、それが魅力ある人物像の上に加重されて、このような異常さまで感じられる親愛・敬愛の人間關係を形成したのではなからうか。本稿起草に当たり、所々にその名を引用させていただいた諸氏を含め、次に掲げる諸文献にもお世話になり、また直々に久富哲雄・中野沙恵両氏にご指導をいただき、心から感謝して止まない次第である。

参考文献

- |              |                 |         |
|--------------|-----------------|---------|
| 校本芭蕉全集(全一〇卷) | 角川書店            | 昭和三十七年刊 |
| 芭蕉講座(全八卷)    | 三省堂             | 昭和二六年〃  |
| 芭蕉の本(全八卷)    | 角川書店            | 昭和四五年〃  |
| 日本古典文学大系     | 岩波書店            | 昭和三七年〃  |
| 杜国新考(一・二)    | 愛知学芸大<br>「研究報告」 | 昭和二八年〃  |
| 鎮魂の旅情「笈の小文考」 | 国語と国文学<br>研究所   | 昭和三二年〃  |
| 芭蕉と杜国        | 松野鶴太郎           | 昭和五七年〃  |
| 俳人杜国         | 天野 志郎           | 昭和二六年〃  |
| 西行山家集全注釈     | 渡部 保            | 昭和五四年〃  |
|              | 風間書房            |         |